

## 近隣関係の希薄化と中庭文化の変化

福島 義和

### 0. はじめに

関西の下町で育ったわたしにとって、北京の胡同（フートン）ツアーは掛け値なしで魅力的なものであった。

都市にはいろいろなオープンスペースがあり、市民生活を豊かにしてくれる。ヨーロッパの典型的な都市には市民的な共同体の表象として都市広場があり、人間の身体に見合ったスケールの歩行者用空間がある。例えばイタリアのシエナには世界一美しいカンポ広場（写真1）があり、ベネチアには共和国の権威の象徴としてサン・マルコ広場（写真2）がある。そしてそれぞれの広場が市民や観光客に愛されている。しかし、陣内秀信によれば「イタリア語で広場を意味するピアツァの称号は、都市全体の政治・宗教の中心サン・マルコ広場にのみ与えられ、他の地区のコミュニティ生活の中心の広場はいずれもカンポと呼ばれている」（『都市のルネサンス：イタリア建築の現在』中公新書、1978）とある。つまり、ピアツァ カンポ コルテといった階層性が、イタリアの都市空間そのものを実に豊かなものにしている。そして、カンポが地区の生活広場として教区教会堂を中心にコミュニティ空間として形成されてきたのに対し、コルテは建物内に取り込まれた中庭である（写真3）。このコルテには井戸<sup>注1</sup>（貯水槽）もあって快適な居住条件を持つ独立性の強い生活環境になっている。



写真1 カンポ広場



写真2 サンマルコ広場

注1）王府井、三眼井、苦水井などの井戸にちなんだ地名が北京市には数多くみられる。もちろんこれらの場所が横丁や路地の空間になっていることはいうまでもない。

本稿で取り扱う胡同ツアーで出会った四合院の中庭「院子（コアンズ）」が、このイタリアのコルテやスペインのパティオに似たすら近いものと考える。

### 1. 胡同地区と近隣関係の変化

筆者は「路地」や「横丁」と訳出される胡同の空間がどれ程まで北京の市民に親しまれているのかは、想像の域をでない。しかし確実に察しがつくのは、伝統的な四合院（写真4）を中心に形成された胡同の空間が北京の市民生活を支えているということである。700年の歴史を持つと言われる胡同地区が2008年開催の北京五輪に向けて急激に変貌しつつある状況は、下町育ちの筆者にとって複雑な思いである。

確かにシンガポールのチャイナタウンが取り壊され、そしてリニューアルされた町並みが観光資源として再生されている。北京市でも、故宮の東側に隣接した胡同地区では、大規模なリニューアル計画がグレーを基調色に進行中である。四合院を核とした胡同の下町の空間が、変化する市民生活にどのように対応しているのか、考察してみよう。

任海<sup>注2</sup>によれば「北京市民は1940年代までは四合院の居住空間に家族単位で住み、ここを中心として地域コミュニティを形成していた。1950年代にはいと都市化により、四合院に親族以外の複数家族が住むようになった。そして1960年代の文化大革命以来、住宅の公有制で、さらに複数家族が住むようになった」と指摘している。1970年代の改革開放期には、中央政府が街道（中国都市管理の行政区画の一つで、区という行政単位に属し、その下部組織を形成）経済の発展に力をいれたこともあり、文化大革命前まで緊密な近隣つき合いがみられた「街道コミュニティ」に変化の兆候が現れた。それは1980年代になると地方からの低所得層の大量流入によって大雑院化した平屋四合院住宅の「街道コミュニティ」は、近隣関係の希薄化に向か



写真3 イタリア・ミラノのコルテ（中庭）



写真4 伝統的な四合院とフォード

注2) 任海氏は現在福島ゼミナールの3年次に在学する中国からの留学生である。

い、90年代には高齢者と低所得者が滞留するなかで、衰退化する近隣関係を生み出すことになる。そして2000年には公有制住宅の個人への売却がはじまり、その結果北京市における「単位コミュニティ（職域を核に社宅に生活関連施設がワンセット）」の住民構成の雑居化・多様化が進んだ。このようにみえてくると、街道コミュニティや単位コミュニティの弱体化、さらには商品楼コミュニティ（写真5）の発達によって、北京市の住民の近隣コミュニティも大きく変化しているようだ。



写真5 商品楼コミュニティ

李国慶<sup>注3)</sup>が社研の定例研究会（2005年3月3日）で、商品楼コミュニティ（近代的な住宅団地として建設され不動産市場を介して比較的高所得者の住民が入居している）に居住する住民がコミュニティへの依存度が低いことを指摘しつつ、階層分化のない平等な関係を維持しつつ、生活文化領域としての「調和コミュニティ」形成の必要性を主張していたことが印象的であった。

## 2. 中庭文化の保存と改築の動き

京都の町屋の坪庭が明り取りや風通しを旨とすることは良く知られているが、院子（コアンズ）という中庭を囲む四合院の建築様式が漢族の住宅としてすでに紀元前10世紀前後の西周時代に確立したものであることは意外に知られていない。中庭には必ず写真6のように少なくと



写真6 中庭の木を囲む四合院

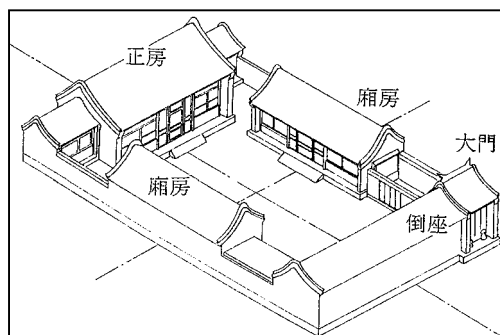


図1 中庭に面した四合院の配置

注3) 李国慶氏は慶応大学で学んだ後、現在中国社会科学院・都市発展と環境研究センターの副研究員として今回の日中の学术交流に多大な貢献を果たして頂いた。

も1本の樹木があり、中庭に面して4棟の家屋が図1のように配列されている。北側に位置して南面する母屋には家長夫婦が居住し、東側には長男の家族の部屋が、西側には次男の家族の部屋が、南側には商人や召使いの部屋が配置されている。現在北京の街中を歩くと、多くの老朽化した町並み（恐らく古い四合院）に遭遇するが（写真7）、イタリアのコルテを囲む住宅や街並みのようなよく保管理された雰囲気はあまりない。それはとりもなおさず、中庭の写真にあるように、中庭を埋め尽くすように増築された建物が占拠していたり、場合によっては中庭に大きな鳩小屋が中央に占拠していることがある。もちろん菊児胡同の四合院（写真8）にみられるように、北京市は著名な建築家（呉良庸・清華大学）を使って改築し、四合院の中層化に成功している。

このようにみえてくると、古い歴史を持つ北京市の街も四合院やその中庭をひとつとってみても確実に変化しつつある。菊児胡同のような四合院の中層化の動きは、新しい住民を北京市の中心部に呼び込む受け皿となっている。戸籍上の制約も存在するが、グローバル化の中で21世紀における社会主義国・中国の街づくりのあり方に今後一層注目していきたい。

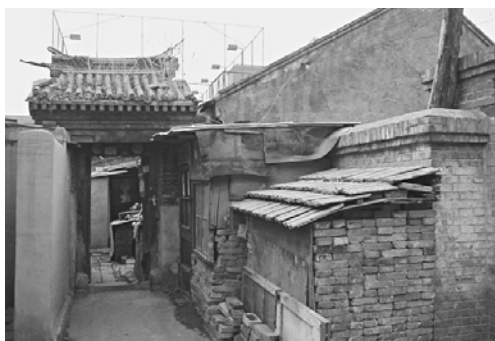


写真7 老朽化した四合院



写真8 四合院の中層化（菊児胡同）

#### 【参考文献】

陣内秀信：『北京 - 都市空間を読む』（鹿島出版、1998）

高村雅彦：『都市の空間を読む』（山川出版社、2002）

大矢根淳：'04元宵節・北京・「胡同・四合院」踏査報告、専修社会学第16号、2004年

今野裕昭：社研定例研究会（2005年3月3日）報告メモ（未公表）

上野和彦・胡佳蔭：北京市における街道経済の変容 東城区を事例として、新地理第52巻  
第4号、2005年